
季節が君だけを変える

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季節が君だけを変える

【Nコード】

N0046B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

冬の寒い日に恋人真紀とデートをする光弘。子供っぽい真紀にいい加減嫌気がさしてきているが。タイトルはBOWYの曲からとりました。ですがストーリーはオリジナルです。

第一章

季節が君だけを変える

乾いた空気が支配する冬の午後。その寒く乾いた冬の駅前のバス停の中で一人の少年が立っていた。

マフラーで首を覆い、さらにコートを着込んでいる。頭の帽子も毛糸でズボンも厚めだ。靴は皮のブーツで外からは見えないが中には毛があつてかなり暖かい。見事なまでの冬の服だった。

この服なら当分外にいても平気だろうと思われる程だった。だが彼はあまり温かい気持ちではなかった。

「遅いなあ、あいつ」

彼は腕時計を見て呟いた。実は人を待っているのだ。

彼の名は上西光弘。高校二年生だ。学校ではごくありふれた普通の学生でありこれといって目立ちはない。普通に学校に通っていてそして普通に彼女がいる。今彼はその彼女を待っているのだ。

背は高い方だった。しかもスラリとしている。顔立ちは少し彫が深く大人びた顔をしている。帽子のせいでよくは見えないがその髪は茶色がかつた黒である。染めているわけではなく地毛だ。

彼女は同じ学校にいる。しかも一年の頃から同じクラスだ。その縁で付き合っている。彼女と言っても友達のような関係に近いかも知れない。

彼女の名を高岡真紀という。彼女には悪い癖があつてよく時間に遅れる。この時もそうだった。彼はそれでイライラしているのである。

待てど来ない。約束をすっぱかしたのかと思いはじめた。たまりかねた彼は携帯を取り出す。それで電話しようとした丁度その時であつた。

「御免なさい」

左から声がした。そこには白いコートと赤地に白と黒の模様のあ

るマフラーを身に着けた小柄な少女がいた。彼女がその高岡真紀である。

見れば本当に小さい。光弘は結構背が高いがそれと比べるとそれが実によくわかる。光弘が覗くと頭の天辺まで見えてしまう。そこまで小さかった。

その背に合わせるかの様に顔立ちも幼い。可愛らしく、眼鏡が実によく似合っている。顔は白くて頬だけがほんのりと赤い。その赤さが童顔をかえって印象付けていた。そんな少女だった。髪は肩を半ば覆っている。黒い髪だった。

「待った？」

「待ったも何も」

光弘は苦い顔でそれに応えた。

「三十分は遅れているよ」

「御免なさい」

「まあいいけれどね」

苦い顔のまま言った。

「それよりもさ、わかってるよね」

「ええ」

「映画。早く行かないとはじまっちゃうよ」

「そうよね。楽しみにしてた映画だし」

今日のデートは映画だ。実は今回は真紀の希望でそうだったのだ。ところがその希望した本人が遅刻してきたのである。話にならないと言えはならない。

光弘は不満はあったがそれを心の中に閉まって二人で映画館に向かった。歩きはじめると真紀が手を組んできた。

「いいよね」

光弘を見上げて尋ねる。

「ああ、いいよ」

彼女と手を組んで悪い気はしない。光弘の手はコートのポケットに突っ込まれたままだったがその手と組んできたのである。

「よかった。遅れてきたから組んでくれないかと思った」
「そんなことないよ」

いつものことから、と言おうとしたがそれは止めた。

「とにかく。行こう」

「うん」

「少し速く歩けば開始時間には間に合うからさ。途中からだったらあれだし」

「そうよね。早く行かないと」

真紀は腕を組んだ後で言う。組むその手には毛糸のミトンがある。白く、ボンボンが先にある紐が付いていた。

「はじまっちゃうわ」

「ちよつと早く歩くよ」

「ええ」

二人は急ぎはじめた。

「買うものは中で。それでいいよね」

「わかったわ。それじゃあ」

こうして二人は映画館に向かった。辿り着き、中に入ると丁度今はじまったところであった。

「ドンピシャってどこか」

「そうね」

二人は暗い映画館の劇場の入り口で言った。

「とりあえず適当なとこに座ってさ。お菓子とか買ってくるから。何がいい？」

「ええと、飴と」

「ふん」

真紀は話しはじめた。光弘はそれを聞く。

「オレンジジュースとチョコレート。それとクッキー」

「いつもながら多いね」

「だって二人で食べるんだし。それでいいでしょ」

「そうだけれどね」

真紀は好みも少女めいている。甘いものがとにかく好きなのだ。

「それじゃあ席を決めたら買って来るね」

「ええ、お願い」

席は結構空いていた。まだはじまったばかりだからだろうか。

適当な席に座ると光弘はお菓子とジュースを買いに行った。それから席に戻った。

席に戻るともう真紀は笑顔で映画を見ていた。映画はファンタジーでよくある剣と魔法の話だ。だが内容は結構子供向けである。

「ほら見て、光弘君」

光弘が席に戻ると声をかけてきた

「今竜が出て来て」

「うん」

実は光弘はこうした子供っぽい内容の映画は好きではないのだ。

仕方なく付き合っている。だがそれを口に出すことはない。黙って一緒に菓子を食べながら映画を見ていた。

映画は確かに面白い。だがやはりどうも好きな内容ではない。彼は映画を見ながらちらりと真紀の方を見た。それから心の中で思った。

（何かな）

最近どうも真紀のそうした子供っぽさに辟易するものがあるのだ。

（何時まで経ってもなあ）

付き合いはじめてもうすぐ一年半になる。一年の頃からだ。その時から真紀は子供っぽく、天真爛漫だった。今も同じだ。だがそんな子供っぽさにはいい加減うんざりするものを感じはじめていたのだ。付き合いが長くなってきたからであろうか。倦怠期というやつか。とにかくどうにも真紀との交際を考えずにはいられなくなってきていたのだ。別れようか、こう思ったこともある。

しかしそれはどうか。真紀は光弘のことが好きなのだ。それなのに自分だけが思っているからと別れるのもまた嫌だった。それでもその子供っぽさにうんざりしだしているのも事実だった。どうしよ

うか考えていた。そしてあれこれと考えているうちに時間だけが過ぎていく。この時もそうであつた。

映画は気が付けば終わつていた。何かあつという間だった。

「面白かつたね」

真紀は屈託のない顔で光弘に声をかけてきた。お菓子もあらかた食べ終わり映画館を後にする時だ。

「まあね」

光弘はやや無表情にそれに応えた。

「あんなものかな」

「すつごい迫力あつたし」

「うん」

それはそうだがどうも陳腐な演出に思えた。

「主人公も格好よかつたし」

「それはね」

だがどうにも動きが激しいだけだった。演技に荒削りな部分が多かつた。

「ヒロインも綺麗だつたし」

「本当にね」

綺麗は綺麗だがあまり光弘の好みではなかつた。やはり子供っぽかつたのだ。

「ビデオになつたらまた観るわ。その時私のお家に来て」

「いいの？」

「ええ。だつて皆いるし」

「そうだね」

これもまた嫌だった。何が楽しくて恋人の家族と顔を合わせなくてはいけないのか。どうにも気まずくなるだけだった。けれど真紀はそんなことには気付かない。まるで友達を紹介するような感覚なのだ。そこがやはり子供っぽいのだ。

第二章

実はキスもまだだ。当然そこから先もない。真紀もそれは知ってるだろうがとにかく子供なのでそうしたことには縁がないのだ。結局光弘はそこにも不満を覚えるのだ。とにかく真紀の子供っぽさの至る所が嫌になってきていた。この映画館でもそれは同じだった。

「これからどうするの？」

映画館を出ると真紀は光弘に尋ねてきた。

「これから？」

「ほら、だってまだ早いし」

時計を見ればまだ四時になったばかりである。彼女は光弘から少し離れてふらふらと歩いていった。本当に幼子の様に。

「まだ遊べるよ」

「そっち門限何時だったっけ」

「特にないよ」

真紀の親は娘にはかなり甘い。そんなもの設けてはいないのだ。そのせいか真紀はかなり無用心だ。そのうえ無防備だ。ここも子供っぽいと言えばそうなるか。無邪気と言うべきか。

「そうなの」

「まあ九時までには帰ろうかなって」

やはり甘い。普通の家なら九時が限度だろう。こんなことで大丈夫なのかとさえ思える。光弘はそんな真紀の無用心さに心配さえ覚えていた。

「あのさ」

「何？」

真紀は光弘の言葉に顔を向けてきた。

「あまり遅くまで出歩かない方がいいよ」

「大丈夫よ」

「何でだい？」

今度は彼が尋ねた。

「だって光弘君がいるから」

「俺が？」

「一緒にいてくれるから。大丈夫よ。お父さんとお母さんにもそう言ってるし」

「そうなんだ」

だがまだ釈然としないものがある。それについて尋ねることにした。

「けどさ」

「今度は何？」

相変わらず疑うことのない無邪気な顔である。

「俺だってさ」

「光弘君私を守ってくれるよね」

「へっ!？」

その言葉に思わず呆然となってしまった。

「だから安心してのよ。夜遅くまでいても」

「はあ」

ここまでくるともう何も言えなかった。

「私だって一人だったら嫌よ、だって何があるかわからないし」

それは二人でも変わらないんじゃないか、と光弘は思ったがそれはやはり口には出さなかった。黙っていた。

「けれど二人だから。安心してられるの」

「そんなものかな」

「それで。何処行くの？今度は」

「何処って言われてもなあ」

光弘は困ってしまった。実はデートはこれで終わりにするつもりだったのだ。ましてや九時までとなると。彼にはどうしていいかわかりかねていた。

困っていると急に風が吹いてきた。そして二人を襲う。

「うわっ」

「きゃっ」

光弘は帽子を押さえる。真紀は髪を。とりあえず彼の帽子は無事だった。

だが真紀は。少し困った様子になっていた。目にゴミが入ったのだ。

「大丈夫かい？」

「うん、今取れたから」

眼鏡を外してゴミを取っていた。それはもう取れたようである。

「いきなり吹いてきたから。びっくりしたわよね」

「うん。こっちも帽子が飛ばされるかと思ったよ」

「よかった。光弘君の帽子が無事で」

「よかったって」

光弘はこの言葉にかえって困惑してしまった。

「困ったのはそっちじゃないか」

「平気よ、よくあることだから」

眼鏡のゴミも取っていた。手入れをしながら言う。

「冬なんだから。慣れてるの」

「はあ」

「だから安心して。眼鏡も綺麗になったし」

ここで真紀は光弘に対して横を向いていた。

「ゴミもなくなったし」

光弘はその横顔を見て思わず呆然となった。彼が今までに見たことのない真紀がそこにいたからだ。

その真紀はそれまでの真紀ではなかった。髪をまだ微かに吹いている風にたなびかせ、すっきりとした横顔をしていた。眼鏡をけないその顔は意外な程大人びていて、美しかった。

「・・・・・・・・・・」

その横顔を見て言葉を失う。真紀はそんな彼に気付いた。

「どうしたの？」

「いや、ちよっと」

その言葉に我に返る。

「何でもないよ」

それはこう言って誤魔化した。

「けれどさ」

そのうえで言う。

「何？」

「今眼鏡かけてるよね」

「ええ」

「眼鏡じゃなくて。コンタクトにしたらどうか。これから」

「どうして？」

「ちよつとね」

光弘は口ごもりながら答える。

「そっちの方が似合うと思って

「そうなの」

「うん」

光弘は答えながら真紀の方にやって来た。そしてその小さな肩を抱く。

第三章

その肩は柔らかかった。それに暖かった。今まで気付いていなかったが思っていたよりずっと大人の香りがした。その香りが彼の心を決めていた。

「次に行くところさ」

「うん」

「俺達付き合ってそろそろ一年半になるじゃないか」

「そうよね」

「それでさ、その」

どうにも顔が赤くなる。中々言えない。

「それでさ、あの」

「あの？」

「まだ高校生だっていつてもさ。もうすぐ、その十八だし。いや、まだなっていないけどね」

真っ赤な顔のまま何とか言葉を出す。

「けれどもういいと思うんだ。ほら、もうすぐ三年だし」

「ホテルってこと？」

「えっ!？」

真紀の不意打ちにやられた。身体も顔も硬直する。

「私と。ホテル行きたいの？」

「い、いや、あの、それは、その・・・」

慌てて何か言い繕うとする。しかし人間というものとは核心を突かれると脆いものだ。この時の光弘がまさにそれだった。もう自分でも何を言っているのかわかっていなかった。

「あのさ、真紀ちゃん」

「ずっと待ってたのよ、私」

「へっ!？」

「光弘君が言ってくれるの。ずっと待ってたのよ」

「待ってたって」

「もう、言わせないでよ」

今度は真紀が頬を赤くさせた。少しムツとした顔になっていた。

「私だって女の子なのよ。だから」

「いいって……こと？」

「そうよ。ずっと待ってたのに」

「はあ」

どうやらここは光弘の負けのようであった。しかもこうしたことでは真紀の方がずっと大人であった。待っていたというのであるから。

「何時誘ってくれるかって待ってたのよ。お家にも呼んだのに」

「お家ってさあ」

「だから。それはオッケーの印なの」

「そうだったんだ」

「女の子が男の子自分の部屋に入れるんだもの。何でわからないのよ」

「だってさあ」

完全に光弘がやり込められていた。こうなってはもうどうしようもなかった。

「それで。何処にするの？」

「それは」

「私は可愛い部屋がいいけれど」

顔を赤くさせて俯いて言う。この時は子供に戻っていた。

「それでも。光弘君に任せるわ」

「有り難う。それなら」

「けれど、優しくね」

「えっ!？」

「私、何も知らないから」

処女であるということだ。

「キスとか。本当に知らないから」

「僕もだよ」

光弘も顔を赤くしてそれに返した。

「僕だつてさ。何も知らないよ」

「何も知らない同士ね」

「うん。けれど」

頬を右の指でかきながら言う。

「宜しく教えてね」

「変な言葉」

真紀はそれを聞いて思わず吹き出した。

「それって女の子が言うものよ、普通」

「そりゃそうだけど」

「何でそんなこと言うのよ」

「それはね」

言おうとしたが止めた。

「いや、何でもないよ」

「そうなの。じゃあ行きましょう」

「うん」

真紀が引つ張って行った。光弘はその後ろで理由を呟いた。心の
中でこっそりとではあるが。

（言えないよな）

その理由はとても。

第四章

（まさか。そっちの方が大人だったなんて）

子供だと思っていたら実は向こうの方がずっと大人だった。顔も心も。何時の間にか大人になっていたのだ。彼が気付かないうちに（何でかな）

「寒いしさ」

「あつ、うん」

真紀の言葉にまた応える。

「お部屋、あつたかいといいよね」

「あつ、そうだね」

細かいところにも目がいつていた。こうしたところでも光弘より完全に大人になっていた。今やつとそれが気付いたのであった。

二人で部屋に入る。今度はさらに驚くことになった。

顔や心だけではなかった。身体も下着も彼が思っているよりずっと大人だった。制服や可愛い私服の下では決してわからないものがそこにあった。

そのさらに向こうも。真紀の方が本当に大人だった。何もかも彼女の方が大人になっていた。

ベッドでのことも全部真紀の言われるがままだった。一応光弘主体だったがそれでも真紀がいないとどうしようもなかった。一緒に風呂呂に入ってから部屋を出る。もう外は真っ暗になっていた。

「息も白いね」

「そだね」

二人の息は完全に白くなっていた。けれど顔は赤くなっていた。

「あのさ」

彼はまた真紀に声をかけた。

「何、今度は」

「あんな下着、何時でも着けてるの？」

真っ赤なショーツにブラ、しかもストッキングも真っ赤でガーターまでしていたのだ。てつきり白かキヤラクターものだろうと高をくくっていたのに彼が見たのは白い成熟した身体にそれであったのだ。それを見てさらに彼女に遅れをとってしまったのである。不覚と言えば不覚か。

「嫌ね、いつもじゃないわよ」

真紀は顔を真っ赤にしたままそれに答えた。顔は赤いままだが恥ずかしがっているのはわかる。

「特別な下着なのよ」

「特別なんだ」

「ええ。こんなの普段は着けないわよ」

「そうだったんだ」

「男の子はそりゃトランクスだけでいいでしょうけど」

「まあね」

正直男は下着に凝らなくていい。彼もそこいらにある安いトランクスを履いているだけだ。

「女の子は違うのよ」

「やっぱり意識して？」

「当然よ」

真紀の顔がさらに赤くなったように見えた。

「意識してたのよ、ずっと」

「ずっと」

「デートの度に。今日あるか今日あるかって。ずっと用意してたんだから」

「はあ」

これはまた意外だった。彼よりもずっと意識していたのだ。

彼も意識していないと言えば嘘になる。だが最近は半分諦めた様子でどうにでもなると考えていた。しかし真紀は常にそれを意識していたというのだ。

「夏もだって秋だって」

真紀はまた光弘に言った。

「ずっと意識してたのよ。何時だっていいように」

「それで今だけれど」

「その度にあれこれ考えてたんだから。けれど光弘君って全然乗っ
てくれないから」

「御免」

「駄目、許してあげない」

謝罪に対する真紀の返事は厳しいものであった。

「折角だから。覚悟してね」

「覚悟って？」

「女の子のはじめてはね、高いのよ」

またえらく使い古され、それでいて効果のある言葉だった。

「甘えさせてもらうんだから」

「そんなこと言ったら僕だってさ」

売り言葉に買い言葉だった。光弘も反撃する。

「はじめてだったんだよ。それはお互い様じゃないか」

「そっか」

真紀はその言葉にはつとした。

「そういえばそうよね」

「そうそう」

光弘は言い返す。

「お互い様なんだよ」

（実際は違うけれど）

自分の方が子供だから。もう真紀が子供にはとても見えなくなっ
ていた。背丈の差はあれど。

「だから」

「わかったわ。じゃあそういうことにしといてあげる」

真紀はその言葉にずっと笑って言った。

「けれど今日は」

「今日は？」

「送ってね、家まで」

「うん」

腕を組んでもたれかかってきた真紀に応える。結局自分より大人になっている真紀に途中から最初から最後まで主導権を握られっぱなしだった。けれどそんな真紀が本当に好きになってしまっていた。冬の寒さの中でそれを感じた。

（若しかすると）

また心の中で思った。

（真紀ちゃんを変えたのはこの冬の寒さかも）

ホテルに入る直前の寒いから暖まろうという言葉思い出したのだ。

（だとしたら）

この寒さに感謝することにした。真紀を変えてくれたこの寒さに自分にそれを気付かせてくれたこの寒さに。

生憎自分は変わってはいなかったが。真紀は変わっていた。美しい大人に。冬の夜空に感謝する寒い夜のデートであった。

季節が君だけを変える

完

2006・5・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0046b/>

季節が君だけを変える

2010年10月8日15時58分発行